

実学を甦らせる実心実学規定

小川晴久

東アジア三国の十七世紀中頃から十九世紀中頃までの、日本の用法で言えば近世の実学思想家九十九人（各国三十三人）を紹介する事典がこの程初めて、しかも三国でほぼ同時にお目見えすることになった。一九九〇年から始まつた全十二回の東アジア三国の実学国際シンポジウムの成果である。

東アジア近世の実学思想家とは何か。一見わかるようで、実は現代の日本人には自明でない。実学には近代以前と近代以後で意味に違いがあるからである。

実学とは何かと問われたら、現代の日本人には、役に立つ学、日用の学として自明である。実業の学である。恩恵を被りながら若干低い位置づけで。しかし実心実学とは何かと問われたら、ほとんどの人が答えに窮するであろう。近代以前の実学は実心を持った実学であつて、そういう実学が東アジアの近代以前にあつたことを、現代の日本人は教わっていないからだ。江戸も遠くになりにけりである。

実は東アジア三国では、儒教が実学を意味した時代があつた。出世間を説く仏教や、自然を模範にした老莊思想に比して、実生活を重視する儒教こそ真実の学＝実学であるという自己意識である。儒教は修己治人の学を自認した。己を修めてこそ人を治めることができるという為政者の学である。治人の側面は男尊女卑に基く身分社会の差別意識に根差すから普遍性を持ちえないが、修己の側面は儒

教の中で評価できる面である。立派な人間である程修己に努めたからである。仁という思いやりの徳は未来永劫必要である。仁は母のまなざしであつて女性原理である。男尊女卑の儒教イデオロギーの根幹に「仁」という女性原理が入つてゐることは注目されてよい。陽明学は知行合一を説いた。これも女性原理である。かかる修己の側面を「実心」と捉えると、修己治人の学は実心実学となる。治人の学は今日の言う実学に該当するから。

近代以前の実学が儒教の代名詞であり、それを実心実学と規定できるとしたら、それは孔子の時代からあつたことになるが、私たちが注目するのは十七・十九世紀のそれである。それはなぜかと言えば、イエズス会の宣教師が東アジアに伝えてくれた西学の洗礼を受けている実心実学でなければならないからだ。マテオ・リッチの世界地図で、世界の中心は中国ではないことを知つた、世界に開かれた実心実学が十七・八世紀の東アジアに実現した。とりわけ私たちが注目するのは十七・八世紀の自然哲学者、自然学者、百科全書派たちの実心実学である。それは「天人」型実心実学と規定できる。彼らの学は十一世紀の中国の張載（張横渠）の氣一元の哲学を哲学基盤に持ちながら、目は広く天（自然、宇宙）に開かれていた。彼らにとつて天は人（彼ら）が順うべき師であつた。誠者天之道也、誠之者人之道也（中庸）。三浦梅園にとつて誠とは倫理ではなく、自然の間断なき當みであつた（「誠といふの説」）。二十一世紀以降の学問は十八世紀の「天人」型実心実学が模範となり、導きの糸となつてくれるとして確信する。モラルとそのスケールに於いて。

そしてこの時期の実学を発見し、国を挙げて嘗々と研究を続けてきたのが隣国朝鮮（南北朝鮮）である。

一九一〇年前後から二〇年代、三〇年代にかけて、つまり日本による三十六年の朝鮮統治時代に朝鮮の知識人たちが、近代を志向し、民族意識に目覚めた新しい思潮（実学）として発見したのである。「实事求是の学風」（文一平）を持つ思想を。朝鮮は十六世紀末、秀吉による侵略（壬辰倭乱）を受け、十七世紀前半には満州族による侵略（丙子胡乱）を受けた。その打撃から立ち直り、疲弊した祖国を再建するために興った学問を二十世紀の知識人たちが、発見し、実学思潮と名づけたのである。民族意識に目覚め、近代を志向した学問とその本質を捉えたので、百年近く国を挙げて研究してきたのは当然である。

振り返って日本を考えると、十七～十九世紀中頃までの江戸時代の思想を実学思想として国を挙げて研究するという嘗みはない。近代以降文明開化の道をまっしぐらに走ってきたからである。近代の日本は教育勅語に儒教道徳を活（悪）用したために、敗戦後は日本思想史の研究は奨励されず、江戸時代の儒教研究は蔑ろにされた。源了圓先生の先駆的研究はあるが、私たち（の研究会）が江戸時代の儒教にまともな関心を示すのは、概して朝鮮実学（韓国実学）研究の影響を受けてからである。朝鮮実学を媒介にしてわかつてきたのは、江戸時代の儒学思想の豊かさであり、同時に近代以前の実学思想の魅力であった。実用の学としての実学と同じ言葉が冠せられているが、そこには実心という要素が大事にされていた。実心実学の発見である。儒教を見直せというのではない。江戸時代の思想にこれからはまともな関心を持つではないか。近代を用意したという近代化の視点ではなく、近代が失つてしまつた大事なものを持ち、且つこれから学問の模範になるような実心実学の群像がそこにある。実心実学という視点が不可欠である。実心のある実学である。